

## 概況

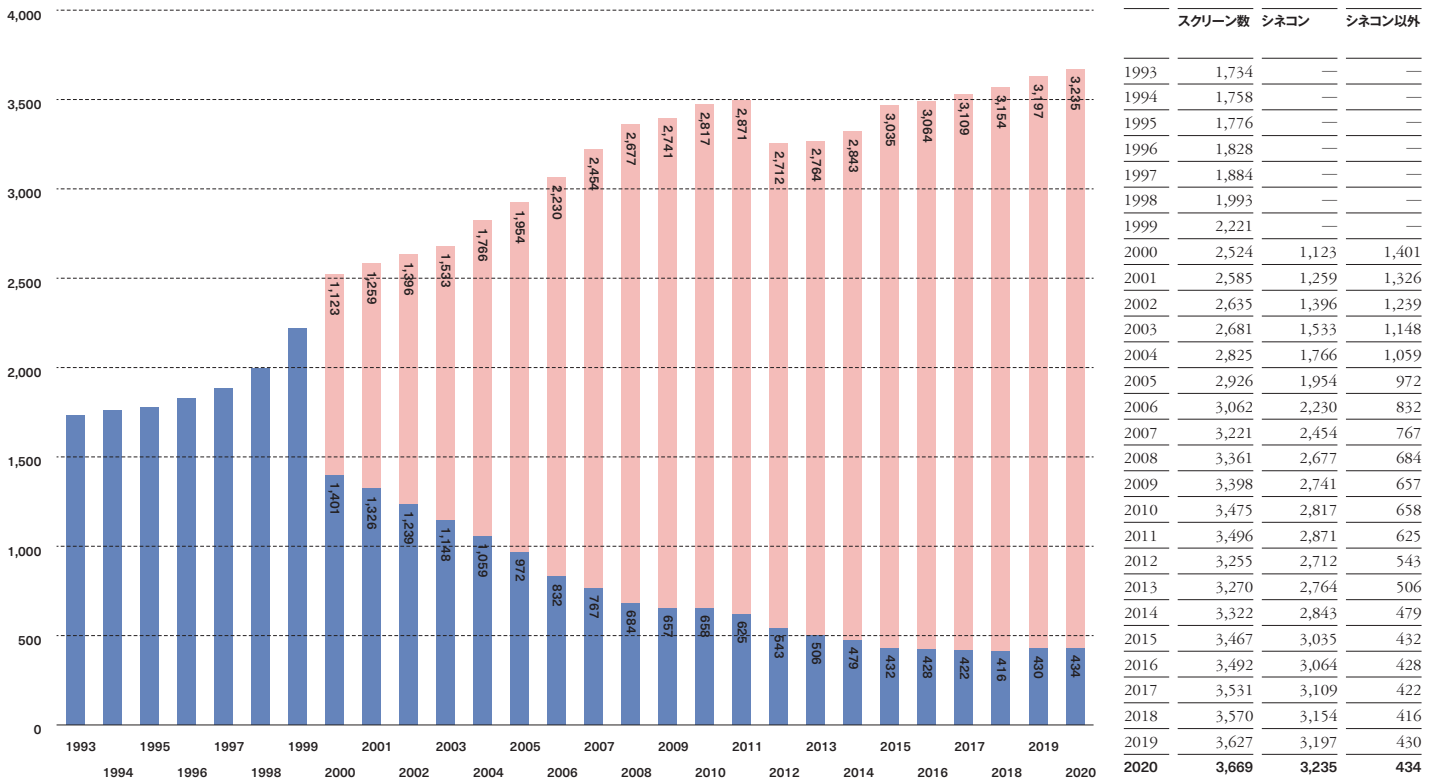
2020年は、「新型コロナウイルスの年」となった。1月半ばに国内初の新型コロナウイルス感染者が報告され、2月中旬を過ぎると感染状況は深刻さを増し、2月末には小中高校に休校要請が出される事態となった。その後も感染者は日を追うごとに増加、ヨーロッパやアメリカでの感染爆発の過酷な状況が伝えられ、3月24日にはオリンピック・パラリンピックの延期が決定された。東京都では週末の外出自粛要請が出され、映画館は週末の

休館を決めた。この頃にはすでに新作映画の公開延期が相次ぎ、映画館の入場者数は前年の8割減、9割減にまで落ち込んでいた。

4月7日に7都府県に発令された緊急事態宣言は4月16日には全国に拡大、全国の映画館が休館するという前代未聞の事態に至る。緊急事態宣言は、5月14日以降、徐々に解除され、5月25日には全国で解除されたが、東京都内の映画館は6月まで再開できず、映画館の休館日数は平均約40日に及んだ。

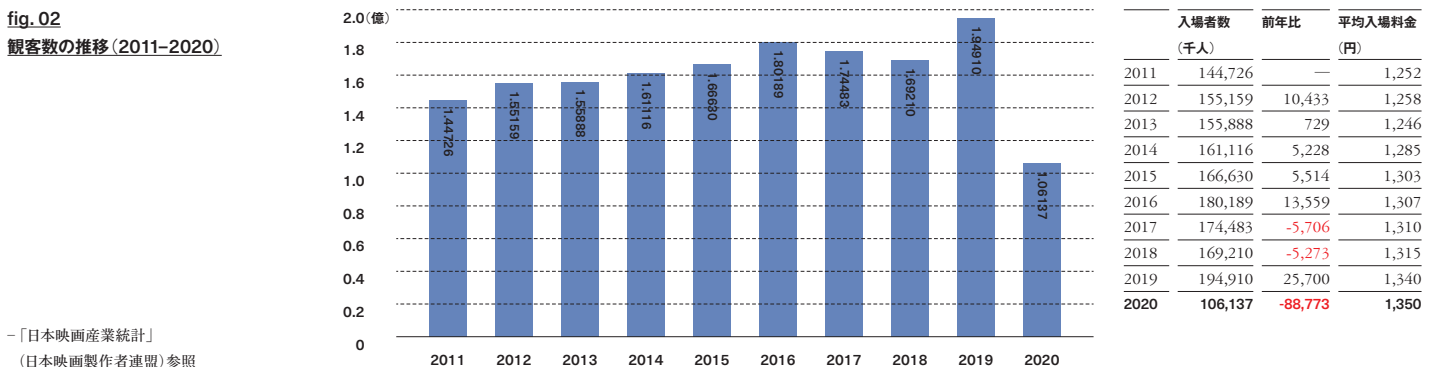
再開後も座席数を50パーセント以下に制限した形での運営が続いた。9月17日に席数制限が解除され、10月には観客はかなり回復していたが、11月下旬になると再び感染者の増加がみられ、観客数にも影響が出はじめた。12月末には東京で1日1000人を越える感染者を確認、1月7日には1都3県において二度目の緊急事態宣言が発令され、1月13

fig.01 スクリーン数の推移(1993-2020)



—「日本映画産業統計」(日本映画製作者連盟)、『映画上映活動年鑑』(コミュニケーションセンター)参照

fig.02 観客数の推移(2011-2020)



—「日本映画産業統計」(日本映画製作者連盟)参照

日には11都府県に拡大された。この緊急事態宣言においては、映画館は休業要請の対象とはされなかったものの、午後8時以降の休業(時短営業)を求められ、ほとんどの映画館はその「協力依頼」に応じたこととなった。2021年1月27日に日本映画製作者連盟が発表した日本映画産業統計によると、2020年の観客数は1億613万7000人で前年比54.5%、興行収入は1432億8500万円で前年比54.9%となっている。

2020年は、コロナ禍の中で全国の映画館が休館し、観客が45%減った年である。影響を受けたのは映画館だけではない。公共施設が休館となり、多くの文化事業が中止となり、上映事業者は仕事を失った。いくつかの映画祭は中止を余儀無くされ、開催された映画祭もイベントを減らし、配信を導入するなど大幅に形を変えることを求められた。

2021年に入っても、コロナは収束せず、社会全体が現在もコロナの影響

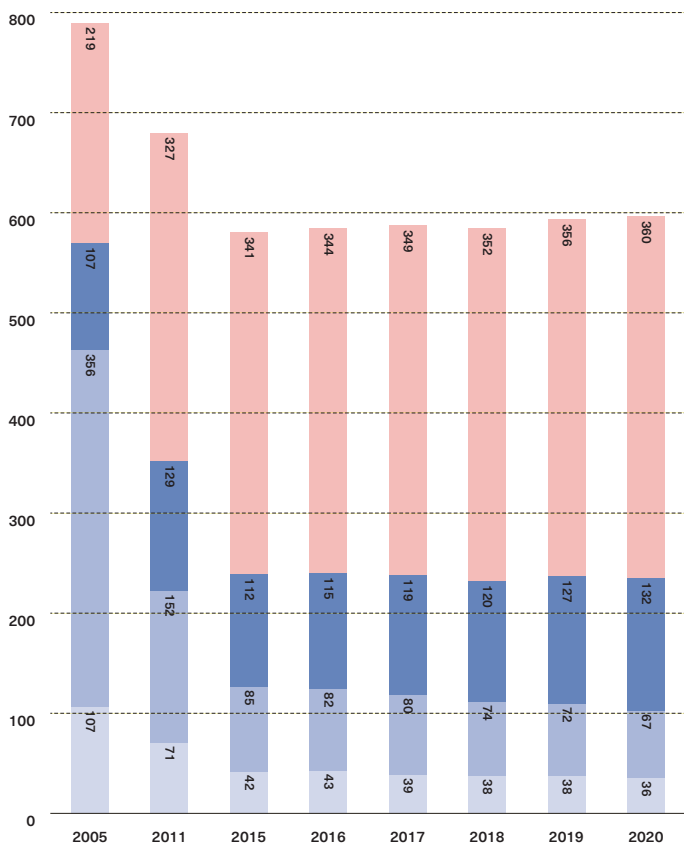
の中にある。何が変わり、変わらざるものは何なのか、変わるべきものは何なのか、考え続ける必要がある。

### 映画館数・スクリーン数

2020年のスクリーン数は3669スクリーンで、前年から42スクリーン増加、映画館数も593館から595館に増加している。2011年から2020年の10年間で、館数は84館減少したが、スクリーン数は173増加している。シネマコンプレックス(シネコン)が33館364スクリーン増加し、シネコン以外の映画館は117館191スクリーン減少している。

シネコンは3235スクリーンで、全スクリーンの88.1%を占めている。館数でも、2011年以降、シネコンが「シネコン以外」の館数を上回り、2020年は

fig. 03 種類別映画館数(サイト数)の変化(2005-2020)



	2005	2011	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2011
									→2020
シネマコンプレックス	219	327	341	344	349	352	356	360	33
ミニシアター/名画座	107	129	112	115	119	120	127	132	3
既存興行館	356	152	85	82	80	74	72	67	-85
成人映画館	107	71	42	43	39	38	38	36	-35
シネコン以外	570	352	239	240	238	232	237	235	-117
合計	789	679	580	584	587	584	593	595	-84

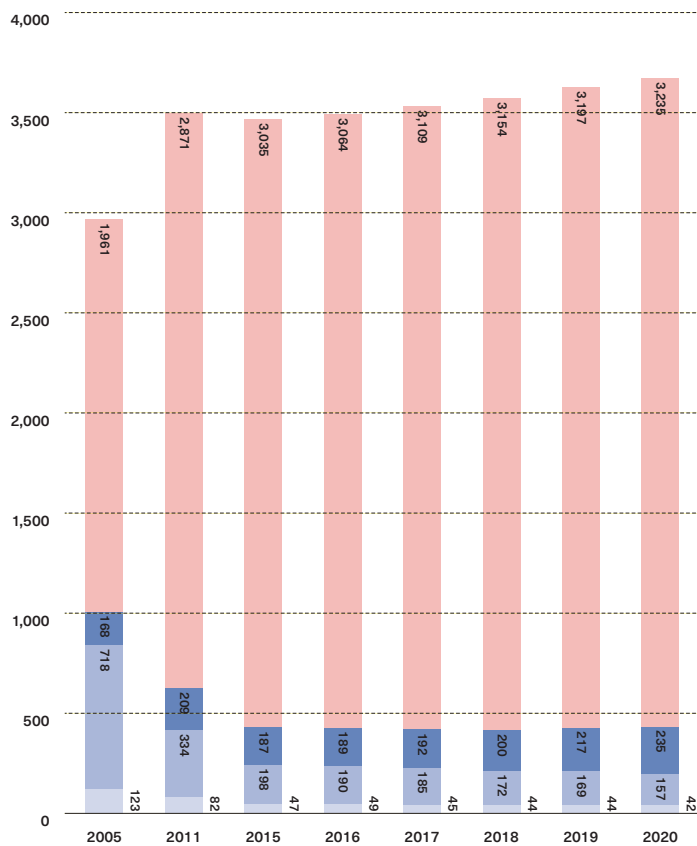
シネマコンプレックス (red) ミニシアター/名画座 (blue) 既存興行館 (light blue) 成人映画館 (grey)

- fig. 03, 04ともに「日本映画産業統計」(日本映画製作者連盟)、「映画上映活動年鑑」(コミュニティシネマセンター)参照

- 本年鑑では、各年の1月1日から12月31日までの間に営業があった映画館を対象としているが、

「日本映画産業統計」(日本映画製作者連盟)の調査では各年の12月末に営業中の映画館を対象としているため、スクリーン数に多少の齟齬がある。

fig. 04 種類別スクリーン数の変化(2005-2020)



	2005	2011	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2011
									→2020
シネマコンプレックス	1,961	2,871	3,035	3,064	3,109	3,154	3,197	3,235	364
ミニシアター/名画座	168	209	187	189	192	200	217	235	26
既存興行館	718	334	198	190	185	172	169	157	-177
成人映画館	123	82	47	49	45	44	44	42	-40
シネコン以外	1,009	625	432	428	422	416	430	434	-191
合計	2,970	3,496	3,467	3,492	3,531	3,570	3,627	3,669	173

シネコン360館、シネコン以外235館で、シネコンが60%となっている。コロナによる休館や観客の減少により閉館する映画館が増えるのではないかと懸念されたが、2020年に閉館した映画館数は10館と、ほぼ平均的な数値となっている。コロナの影響が顕著となる中、2020年4月に「ルミエール秋田」(秋田市/5スクリーン)が閉館、日本最南端の小劇場(ミニシアター)として2018年に開館した石垣島の「ゆいロードシアター」(1スクリーン)が長期休館となり、5月には山形県鶴岡市のまちづくり会社が運営する「鶴岡まちなかキネマ」(4スクリーン)が閉館を発表、危機感が走ったが、ルミエール秋田は、3スクリーンの映画館「アルヴェシアター」として12月に再開、鶴岡まちなかキネマ、ゆいロードシアターも再開を目指して模索が続いている。

一方、2020年に12の映画館(69スクリーン)が開館している(移転・リニューアルオープン含む)。→ [fig. 01-04](#)

## 観客数

2020年の観客数は、前述のとおり、1億613万7000人で前年比54.5%となり、観客数、興収とも2000年代に入って最高を記録した2019年から一転、1955年以降最低を記録した。ハリウッドの大作が軒並み公開延期となる中、日本映画では『劇場版「鬼滅の刃」無限列車編』が365.5億円と全興収の20%に及ぶ大ヒットを記録、コロナの影響に苦しむ映画館を救う貴重な作品となった。→ [fig. 02](#)

## 種類別にみる映画館数・スクリーン数の変化

### シネマコンプレックス(シネコン)

シネコンは360館3235スクリーンで最も多く、全スクリーン数(3669)の88.1%を占めるに至っている。10年間では、33館364スクリーン増加している。2000年代に入ってから2008年までは、毎年20-30館のペースでシネコンがつくられてきたが、2009年以降はそのスピードは緩やかになり、現在は年間5-10館が開館するペースに落ち着いている。2020年にも首都圏に4つのシネコン「T・ジョイ横浜」「イオンシネマ座間」「TOHOシネマズ池袋」「TOHOシネマズ立飛」と、九州に2つのシネコン「セントラルシネマ三光」(大分県中津市)、「ワンダーアティックシネマ」(宮崎市)が開館している。

### 既存興行館

既存興行館は67館157スクリーンとなり、10年間で、映画館数85館減、スクリーン数177スクリーン減となっている。2010-2013年に映画上映のデジタル化が進み、ほとんどの既存館やミニシアターもフィルム映写機からデジタルシネマ機に移行したが、大規模な設備投資に耐えられない既存興行館の閉館が続き、1年に15-20館が閉館する年が続いたが、現在は落ち着いた状況となっている。

### ミニシアター/名画座

ミニシアター/名画座は、132館235スクリーンで、この10年間で3館26スクリーンの増加となっている。2019年に「キノシネマ立川高島屋S.C.館」「キノシネマ横浜みなとみらい」「ホワイトシネキント」等7館もミニシアターが開館したのに続き、2020年も「キノシネマ天神」(福岡)、「サツゲキ」(札幌)、「アップリンク京都」、「ほとり座」(富山、フォルツァ総曲輪跡)4館が開館している。

既存興行館の中には番組をミニシアター的な編成に変えてシネコンと差異化することで存続を図る劇場が増えている(宇都宮ヒカリ座、千葉劇場、塩尻東座、長野ロキシー、シネックス、進富座等)。また、閉館した既存興行館が、別の運営団体によって再開され、ミニシアター的なプログラミングを採用する例も(上田映劇、御成座、横浜シネマリン、高田世界館、豊岡劇場、シアターシエマ、日田リベルテ等々)増えている。「新しい」既存興行館の開館もあり(アルヴェシアター(秋田)、シネマサンライズ日立、大川シネマホール(福岡)等)、従来の「シネマコンプレックス」「既存興行館」「ミニシアター/名画座」という分類では映画館の現状を把握することが難しくなっている。

成人映画館は、36館42スクリーンとなり、10年間で半減している。→ [fig. 03\\_04](#)

## 地方別にみる種類別映画館数・スクリーン数

2020年の全国の映画館数は595館で、10年間で84館減少している。スクリーン数は3669スクリーンで173スクリーン増となっている。地方別にみると、映画館数・スクリーン数がともに減少しているのは北海道・東北地方と中部地方である。関東地方を除くすべての地方で人口は減少しているが、北海道・東北地方は5.8%減少と、他の地方に比べて人口の減少率はかなり高い。中部地方では、2019-2020年に2つのシネコンを含む6館が閉館したことにより、24館11スクリーン減となった。

また、全人口、全スクリーン数に占める各地方のシェアを比較すると、中部地方と九州・沖縄地方が人口シェアに比べてスクリーンシェアが1%以上高くなっている。九州・沖縄地方はこの10年間で館数・スクリーン数とも増加しており、スクリーンシェアが2%以上増えている。

シネコンは、ほとんどの地域において映画館数、スクリーン数ともに増加しているが、2000年代に入ってから2008年までの毎年20-30館のシネコンが開館していた時期と比較すると、増加のペースは緩やかになっている。とはいえ、10年間では、関東地方(10館129スクリーン)や、近畿地方(8館92スクリーン)、九州・沖縄地方(8館70スクリーン)など、依然として大幅に増加している地方もある。北海道・東北地方のみ4スクリーン減少となっている。

「シネコン以外」の数値は、いずれの地方でも館数、スクリーン数ともに減少している。ただし、「ミニシアター/名画座」は、北海道・東北地方、中国・四国地方では減少しているものの、それ以外の地方では10年前よりも増加している。この10年間で41のミニシアター/名画座が開館しており、東京・大阪・名古屋・京都・広島といった大都市以外でも、大館市(御成座)、那珂市(あまや座)、上越市(高田世界館)、上田市(上田映劇)、豊岡市(豊岡劇場)、唐津市(シアターエンヤ)、沖縄市(シアタードーナツ、シネプラザハ

ウス1954)など、20万人以下の中小市町村でミニシアターがつけられることが増えている。2021年に開館を予定しているミニシアターもある。一方、既存興行館はこの10年で、関東では23館44スクリーン減、中部地方は21館41スクリーン減、近畿でも15館37スクリーン減となっている。当初、多くのシネコンが郊外の幹線道路沿いに多くつくられたが、こ

の10年間は中心市街地での開設が続き、東京、名古屋、大阪、兵庫など大都市の中心市街地の既存興行館が姿を消した。成人映画館は、全ての地方において減少している。2020年3月には60年以上の歴史をもつ金沢市の老舗映画館「駅前シネマ」が閉館した。→ fig.05

fig.05  
地方別にみる種類別映画館数・スクリーン数の変化(2011-2020)

	2020		2011		2011→2020		
	映画館	スクリーン	映画館	スクリーン	映画館	スクリーン	
<b>北海道・東北地方</b>							<b>北海道・東北地方の人口</b>
シネマコンプレックス	41	311	41	315	0	-4	2020 13,859,689
ミニシアター/名画座	8	21	12	23	-4	-2	2011 14,717,500
既存興行館	13	30	26	48	-13	-18	増減(人) -857,811
成人映画館	3	3	5	6	-2	-3	増減率(%) -5.8%
シネコン以外	24	54	43	77	-19	-23	
<b>北海道・東北地方合計</b>	<b>65</b>	<b>365</b>	<b>84</b>	<b>392</b>	<b>-19</b>	<b>-27</b>	
<b>関東地方</b>							<b>関東地方の人口</b>
シネマコンプレックス	121	1,135	111	1,006	10	129	2020 43,524,557
ミニシアター/名画座	56	94	56	88	0	6	2011 42,633,585
既存興行館	17	36	40	80	-23	-44	増減(人) 890,972
成人映画館	4	7	11	15	-7	-8	増減率(%) 2.1%
シネコン以外	77	137	107	183	-30	-46	
<b>関東地方合計</b>	<b>198</b>	<b>1,272</b>	<b>218</b>	<b>1,189</b>	<b>-20</b>	<b>83</b>	
<b>中部地方</b>							<b>中部地方の人口</b>
シネマコンプレックス	69	639	67	606	2	33	2020 21,104,569
ミニシアター/名画座	20	31	18	26	2	5	2011 21,655,262
既存興行館	10	27	31	68	-21	-41	増減(人) -550,693
成人映画館	10	10	17	18	-7	-8	増減率(%) -2.5%
シネコン以外	40	68	66	112	-26	-44	
<b>中部地方合計</b>	<b>109</b>	<b>707</b>	<b>133</b>	<b>718</b>	<b>-24</b>	<b>-11</b>	
<b>近畿地方</b>							<b>近畿地方の人口</b>
シネマコンプレックス	55	509	47	417	8	92	2020 22,242,762
ミニシアター/名画座	18	39	19	33	-1	6	2011 22,726,242
既存興行館	12	34	27	71	-15	-37	増減(人) -483,480
成人映画館	11	12	19	21	-8	-9	増減率(%) -2.1%
シネコン以外	41	85	65	125	-24	-40	
<b>近畿地方合計</b>	<b>96</b>	<b>594</b>	<b>112</b>	<b>542</b>	<b>-16</b>	<b>52</b>	
<b>中国・四国地方</b>							<b>中国・四国地方の人口</b>
シネマコンプレックス	32	254	27	210	5	44	2020 10,921,754
ミニシアター/名画座	10	16	11	17	-1	-1	2011 11,489,876
既存興行館	7	15	16	39	-9	-24	増減(人) -568,122
成人映画館	2	2	6	7	-4	-5	増減率(%) -4.9%
シネコン以外	19	33	33	63	-14	-30	
<b>中国・四国地方合計</b>	<b>51</b>	<b>287</b>	<b>60</b>	<b>273</b>	<b>-9</b>	<b>14</b>	
<b>九州地方・沖縄</b>							<b>九州地方・沖縄の人口</b>
シネマコンプレックス	42	387	34	317	8	70	2020 14,199,982
ミニシアター/名画座	20	32	13	22	7	10	2011 14,578,250
既存興行館	8	17	12	28	-4	-11	増減(人) -378,268
成人映画館	6	8	13	15	-7	-7	増減率(%) -2.6%
シネコン以外	34	57	38	65	-4	-8	
<b>九州地方・沖縄合計</b>	<b>76</b>	<b>444</b>	<b>72</b>	<b>382</b>	<b>4</b>	<b>62</b>	
<b>全国</b>							<b>全国の人口</b>
シネマコンプレックス	360	3,235	327	2,871	33	364	2020 125,853,313
ミニシアター/名画座	132	233	129	209	3	24	2011 127,800,715
既存興行館	67	159	152	334	-85	-175	増減(人) -1,947,402
成人映画館	36	42	71	82	-35	-40	増減率(%) -1.5%
シネコン以外	235	434	352	625	-117	-191	
<b>全国合計</b>	<b>595</b>	<b>3,669</b>	<b>679</b>	<b>3,496</b>	<b>-84</b>	<b>173</b>	

- 人口:総務省統計局発表「人口推計」(各年10月1日現在)参照

- 映画館数・スクリーン数:「日本映画産業統計」(日本映画製作者連盟)、「映画上映活動年鑑」(コミュニティシネマセンター)参照